

## 4 . 文学部・人文社会系研究科

文学部・人文社会系研究科の研究目的と特徴	・ 4 - 2
分析項目ごとの水準の判断	・ . . . . . 4 - 4
分析項目 研究活動の状況	・ . . . . . 4 - 4
分析項目 研究成果の状況	・ . . . . . 4 - 10
質の向上度の判断	・ . . . . . 4 - 13

## I 文学部・人文社会系研究科の研究目的と特徴

- 1 人文社会系研究科は、大学院重点化に際して、人文科学研究科と社会学研究科が再編されて1995年4月に発足した。本研究科の目的は、「東京大学大学院人文社会系研究科規則」（資料4-1）にあるとおり、思想、歴史、言語、社会に関する真理の探究と知の創造を求め、高度な教養と思考力、表現力の涵養を通して、人類文化の発展に寄与することである。東京大学の中期目標に掲げられているように、本研究科では、人間活動にとって基礎をなす人文知の体系化と継承的発展に積極的に取り組んでいる。

（資料4-1：東京大学大学院人文社会系研究科規則（抜粋））

### 東京大学大学院人文社会系研究科規則

（教育研究上の目的）

第1条の2 本研究科は、人間の思想、歴史、言語、社会に対する真の理解をめざして教育と研究を実践することにより、高度な教養と思考力、表現力を身につけ、人類文化の発展に寄与する人材を養成することを目的とする。

2 各専攻の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的は、別に定める。

- 2 この目的を達成するために、以下の2点を研究活動の中心に据える。

研究の体系化と継承

萌芽的・先端的研究の開拓

その中で、以下の諸点に配慮している。

- （1）研究成果の社会への還元と活用
- （2）学内外での横断的な共同研究の活性化
- （3）資料情報データベースの構築と公開
- （4）国際学術交流の促進と拡大

- 3 この目的を実現するために、既存のディシプリンを維持・発展させるだけでなく、新たな学問領域を開拓している。これは、人類の文化と社会の持続可能性を保障する知的、精神的基盤の確保に貢献する。以下の分野の研究が特に重要である。

文化的活動の基礎：思考・認識・感情・言語・表現・文物・制度の根源的理解

日本の文化と歴史：世界的な視野に立つ自国理解

アジアの文化と歴史：多様な歴史展開とその多元的理解

欧米の文化と歴史：原典・史料の読解、欧米系文化の生成・展開の理解

現代における人間と社会：調査・実験・観察・資料分析による理論的・実証的理解

文化資源の発掘、考証、保存と公開：人文社会系諸学との連携と一般社会への還元

国際的な視野にたつ地域研究：多角的視点に立つ文化・歴史・社会の相互理解

- 4 本研究科は、上述の各分野における学術研究の体系化と継承を確保しながら研究を推進するために、東京大学大学院学則（資料4-2）にあるとおり、7専攻を置く（別添資料4-1：人文社会系研究科7専攻の教育研究上の目的、P4-14）。2005年4月に、附属文化交流研究施設を改組して、萌芽的・先端的研究の開拓を図るために「附属次世代人文学開発センター」を立ち上げた。

[ 想定する関係者とその期待 ]

国内外の人文社会系諸学の学界及び人文社会系諸学の社会的貢献に期待を寄せる一般社会の人々が関係者であり、前者は萌芽的・先端的研究と新たな学問領域の開拓を期待し、後者は、人文知をめぐる社会性に富む研究活動の促進と学術成果の社会的還元及び文化的貢献を期待している。

(資料4 - 2 : 東京大学大学院学則 (抜粋))

東京大学大学院学則

(専攻)

第4条 研究科等に置かれる専攻は次のとおりである。

人文社会系研究科

基礎文化研究      日本文化研究      アジア文化研究

欧米系文化研究      社会文化研究      文化資源学研究

韓国朝鮮文化研究

## 分析項目ごとの水準の判断

## 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

## 研究の継承的発展と萌芽的・先端的研究の活性化

巨視的な視野のもとに長期的かつ継続的な研究活動を以ってしてはじめて可能になる体系的研究の推進と継承的発展に意欲的かつ着実に取り組む一方で、萌芽的・先端的研究の活性化にも積極的に取り組み、学内外の横断的な共同研究の活性化を推進している。代表的な事例としては、21世紀COE研究拠点形成プログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」(2002～2006年度)とグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」(2007～2011年度)、及び「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」(2006～2011年度特定領域研究)が挙げられる。前者は島菌進教授を拠点リーダーとし、古今東西の死生観の比較研究や死生の価値に関する理論的研究を踏まえ、現代社会の死生の現場や臨床の現場に生起する諸問題に応答することを通して、世界最高水準の先端的研究拠点を開発し、形成しようとするものである。このプロジェクトは本研究科の教員を中心に、医学や医療等の他分野の専門家との共同研究によって推進されている。後者は小島毅准教授を総括班代表者とし、東アジアの海域における人的・物的交流の歴史を多分野横断的に分析すると共に日本の伝統文化形成過程を再検討して、日本文化の歴史的起源を再構成することを目的とするものである。このプロジェクトは国内外の文系理系の研究者総勢137人を擁し、国際的かつ学際的な総合研究を推し進めている。このほか、萌芽的な研究領域の開発に取り組む一例として「イスラーム地域研究部門」(2006年度附属次世代人文学開発センターに設置)が挙げられる。同研究部門では、人間文化研究機構と協力し、イスラーム地域を対象に、18世紀以降の近現代における思想と政治の動態にみちた相互関係を比較と連関の視点から実証的に研究することを目的とし、従来にはない新たな研究領域の開拓に取り組んでいる。

## 国際学術交流の促進と拡大

本研究科では、学術成果の海外発信と国際的な成果の受容に努め、国際シンポジウムや海外研究者による公開講座等の開催に積極的に取り組んでいる(別添資料4-2:人文社会系研究科及び同研究科各専攻主催の講演会・シンポジウム・公開講座等、P4-15)。また、国際交流協定を結ぶアジアや欧米の大学及び研究機関と学術交流を行い、研究者の派遣と受入れを積極的に行っている(資料4-3:国際交流協定による研究者の派遣と受入れ)。

東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目

(資料4-3: 国際交流協定による研究者の派遣と受入れ)

国名	大学名		2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	総計
アメリカ合衆国	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校	受入	0	0	0	1	1
		派遣	0	1	0	0	1
	ミシガン大学社会科学総合研究所・総合国際研究所	受入	0	7	0	3	10
		派遣	7	4	0	1	12
フランス	エコール・ノルマル・スーペリユール	受入	4	1	0	3	8
		派遣	2	3	1	3	9
ドイツ	ポッフム・ルール大学	受入	2	1	0	3	6
		派遣	0	2	0	0	2
	ブレーメン大学文化学部	受入	0	0	1	1	2
		派遣	0	0	0	0	0
スイス	ジュネーブ大学	受入	7	4	0	0	11
		派遣	1	0	1	0	2
イタリア	パドヴァ大学	受入	1	1	0	0	2
		派遣	1	0	1	0	2
	フィレンツェ大学	受入	2	1	1	4	8
		派遣	3	0	0	0	3
	ローマ大学「ラ・サピエンツァ」	受入	0	1	2	6	9
		派遣	0	0	0	5	5
ピサ高等師範学校	受入	0	0	0	0	0	
	派遣	1	0	2	0	3	
ポーランド	ワルシャワ大学	受入	1	1	1	1	4
		派遣	0	1	1	0	2
ロシア	ロモノソフ記念モスクワ国立大学	受入	0	1	0	0	1
		派遣	1	1	0	1	3
モロッコ	アブデルマレク・エッサディー大学文学部	受入	1	0	0	0	1
		派遣	0	0	1	0	1
エジプト・アラブ共和国	カイロ大学	受入	0	0	0	1	1
		派遣	0	0	1	1	2
イラン	テヘラン大学	受入	0	0	0	0	0
		派遣	0	1	1	1	3
中国	北京大学	受入	2	4	1	4	11
		派遣	2	3	1	1	7
	山東大学文史哲研究院・韓国研究中心	受入	0	3	4	1	8
		派遣	1	0	0	0	1
韓国	高麗大学	受入	0	1	0	16	17
		派遣	0	1	0	5	6
	釜山大学	受入	0	1	1	1	3
		派遣	0	0	0	0	0
	ソウル大学校	受入	26	2	1	0	29
		派遣	4	6	1	19	30
総計		受入	46	29	12	45	132
		派遣	23	23	11	37	94

国際グローバル化に伴い多文化の共存が緊急課題となっている現代世界において、人文社会系諸学の重要性は一層増している。それにも関わらず、自然科学に比べて短期的な社会還元の結果が分明ではないため、国外でも人文学の危機が叫ばれている。本研究科では、人文社会系諸学が直面する諸問題の解決を目指して、海外の研究機関や研究者との連携・協働を強化し、国際交流の拡大にも努めている。具体的な事例として、2007年3月に「イエール大学/東京大学 人文学教育推進セミナー」を開き、人文学教育の現状と展望について討論と意見交換を行った（別添資料4-2、P4-15。セミナーを通して、人文学が培われてきた歴史的、社会的及び経済的背景に関する日米両国間の差異が明らかになり、日本の人文学を取り巻く現状の深刻さが一層明確に認識された。同時に、人文学の重要性を日本社会に認知させる有効な方略も提示され、有益な成果を収めた。また、同月末には北京大学人文学部、ソウル大学校人文大学、本研究科の三者間で協議を行い、人文学諸分野の学术交流を促進・強化し、東アジアにおける新たな人文学の可能性を切り開くための「PESETO 人文学会議」を設立した。

#### 論文著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

本研究科の教員は、著書や論文など多様な形態で1人当たり年間3～4件程度の研究成果を発表しており、論文はその約40%を占める（資料4-4：研究業績件数）。発表のうち、毎年100件近くは和文以外でなされており、英語に限らず多様な言語での発表が行われている。和文以外で発表された論文の多くは、『漢語学報』、Nature Neuroscience、NeuroImage、Psychological Science、Chroniques de Port-Royal 等々の権威ある海外のトップ・ジャーナルに掲載されており、研究成果の海外発信に貢献している。著書は年間120件を超え、成果を論文よりは著書として発表することが多い本研究科の特徴を示している。

#### 社会的貢献を目指す研究活動の活性化

公開講演会や公開シンポジウム、さらには公開講座の開催なども活発に行い、研究成果の社会的還元を図るとともに、一般社会とのインターフェイスを通して、社会性に富む広範かつ多様な研究活動を活性化することにも力を注いでいる（別添資料4-2、P4-15。本研究科の附属北海文化研究施設が所在する北海道北見市(旧常呂町)において2000年以来地域社会との連携のもとに継続してきた「常呂公開講座」は、過去4年間に5回の講座を開き、多数の高校生を含む800余名の受講生を迎え、地域文化の発展に大きく寄与した。また、2007年6月から始まった文化資源学公開講座「市民社会再生」(全12回)では、アートディレクターや演出家など文化振興の現場に携わる学外の有識者をも講師に迎え、受講生とともに市民社会の再生における文化の有効性を探るという新しい試みがなされた。

東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目

(資料4-4: 研究業績件数)

研究業績件数(2004年度)

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数	平均件数
基礎文化研究専攻	75	6	8	4	1	29	1	34	13	10	0	181	33	47	3.9
日本文化研究専攻	48	2	7	0	0	4	1	24	10	3	4	103	2	21	4.9
アジア文化研究専攻	50	3	12	1	0	8	6	18	35	4	0	137	28	29	4.7
欧米系文化研究専攻	26	3	9	0	2	15	4	29	12	7	0	107	16	36	3.0
社会文化研究専攻	24	7	0	0	0	5	0	23	1	3	0	63	21	13	4.8
文化資源学研究専攻	12	0	3	0	0	2	0	2	1	1	1	22	2	9	2.4
韓国朝鮮文化研究専攻	12	0	0	0	0	4	0	8	1	2	1	28	1	9	3.1
附属施設	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	5	0	2	2.5
計	250	21	39	5	3	67	12	140	73	30	6	646	103	166	3.9

研究業績件数(2005年度)

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数	平均件数
基礎文化研究専攻	93	4	8	0	4	25	3	28	5	8	0	178	37	47	3.8
日本文化研究専攻	32	0	13	1	0	6	1	19	7	1	2	82	1	21	3.9
アジア文化研究専攻	34	2	11	3	0	7	4	24	20	5	0	110	21	28	3.9
欧米系文化研究専攻	30	4	4	1	1	3	3	25	12	3	0	86	9	35	2.5
社会文化研究専攻	32	9	6	0	0	2	0	25	4	5	0	83	20	10	8.3
文化資源学研究専攻	14	1	4	0	0	2	0	6	0	0	0	27	4	9	3.0
韓国朝鮮文化研究専攻	18	0	2	1	2	5	0	10	0	3	0	41	1	9	4.6
附属施設	3	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	5	1	3	1.7
計	256	20	48	6	7	50	12	138	48	25	2	612	94	162	3.8

東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目

研究業績件数（2006年度）

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数	平均件数
基礎文化研究専攻	79	6	11	3	0	25	15	29	7	4	0	179	26	46	3.9
日本文化研究専攻	31	7	7	1	0	6	3	9	8	3	1	76	3	19	4.0
アジア文化研究専攻	58	0	5	2	1	3	4	22	30	3	0	128	30	30	4.3
欧米系文化研究専攻	31	3	15	2	3	7	12	30	19	2	0	124	19	33	3.8
社会文化研究専攻	49	3	8	0	0	5	5	23	7	3	0	103	16	12	8.6
文化資源学研究専攻	8	3	1	0	0	0	0	2	2	3	0	19	3	8	2.4
韓国朝鮮文化研究専攻	15	0	1	0	0	0	0	5	1	3	1	26	4	9	2.9
附属施設	8	1	0	0	0	1	2	3	0	1	0	16	0	4	4.0
計	279	23	48	8	4	47	41	123	74	22	2	671	101	161	4.2

研究業績件数（2007年度）

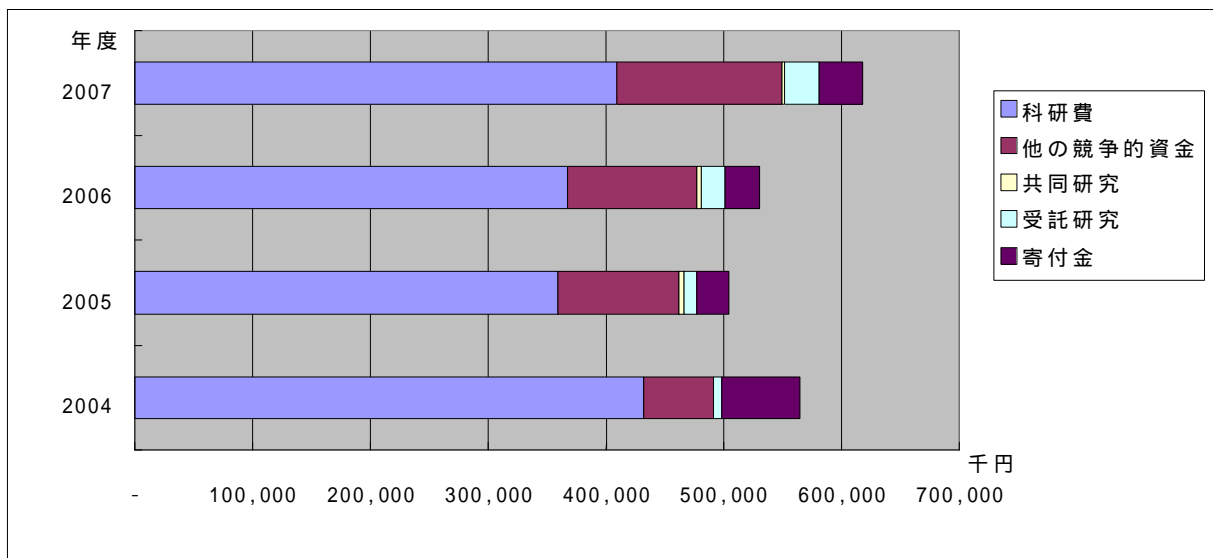
専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数	平均件数
基礎文化研究専攻	71	4	12	2	3	31	14	19	11	4	0	171	30	45	3.8
日本文化研究専攻	39	2	6	2	2	1	1	10	11	1	2	77	4	21	3.7
アジア文化研究専攻	28	0	3	0	1	2	4	12	15	3	0	68	13	29	2.3
欧米系文化研究専攻	24	1	28	1	0	7	8	27	14	4	3	117	14	35	3.3
社会文化研究専攻	26	4	2	0	0	1	8	11	9	5	0	66	12	13	5.1
文化資源学研究専攻	8	7	1	0	0	1	0	1	0	0	0	18	4	7	2.6
韓国朝鮮文化研究専攻	2	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0	8	0	8	1.0
附属施設	6	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	10	0	4	2.5
計	204	18	53	5	6	47	36	84	60	17	5	535	77	162	3.3



研究資金の獲得状況

2004年度以降の科学研究費補助金の申請は103～107件、採択は85～91件で推移し、総採択件数は348件（総額1,171,280千円）であった（別添資料4-3：年度別科学研究費補助金採択件数・金額、P4-18）。科学研究費補助金以外の獲得資金は年度を追って増加している（資料4-5：外部資金の獲得状況）。約160名の教員に対し獲得資金は2007年度には総額で6億円を超え、教員1人当たり400万円を獲得している。なお、2007年度から（財）上廣倫理財団の寄附によって附属次世代人文学開発センター内に上廣死生学講座が設置された。

（資料4-5：外部資金の獲得状況）



観点 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

（観点に係る状況）

該当しない。

（2）分析項目の水準及びその判断理由

（水準）期待される水準を大きく上回る。

（判断理由） 研究業績のうち著書の占める比率が高く、体系的な研究の蓄積と学問の継承性が重要視される人文社会系諸学の期待に大きく応えている。また、公開講演会や公開講座なども活発に開き、社会性に富む研究活動に積極的に取り組み、地域社会や人文学に関心を寄せる一般社会の人々の期待にも大きく応えている。論文の多くが海外の権威ある学術誌に掲載されており、本研究科の国際的認知度はきわめて高い。21世紀COE研究拠点形成プログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」（2002～2006年度）とグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」（2007～2011年度）に代表される萌芽的・先端的な研究領域の開発と、横断的・学際的共同研究への取り組みは、人文社会系諸学の新たな学問領域の開発を待望する国内外の学界の期待に大きく応えている。研究資金面では、科学研究費補助金以外の外部からの競争的資金の獲得が増加傾向にあることが高く評価できる。

分析項目 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附属研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

学術的成果の状況

本研究科において人文知の体系化と継承的発展を目指す研究活動の成果は、研究業績説明書(表)の諸例がその一端を示すように、国内外の権威ある学術誌や新聞紙上及び海外の学会において高い評価を受け、また、海外のトップ・ジャーナルにおいてもしばしば引用され、あるいは書評の対象に選ばれている。研究業績リストに挙げる『近世後期政治史と対外関係』、『芸術の条件 - 近代美学の境界』、『西洋哲学史』、『日唐律令制の財政構造』、『近代日本の思想・再考』、『中国思想と宗教の奔流—宋朝』、『*A History of the Early Islamic Law of Property, From Salvation to Spirituality: Popular Religious Movements in Modern Japan, Nationalism and Gender*』などをはじめとして、四百数十篇を数える著作(資料4-4:研究業績件数、P4-7の多くは、人文知の体系化に寄与する重厚な学術的成果を収めている。また、下田正弘教授らによって構築された『大正新脩大蔵経』テキストデータベースは、国内の人文科学領域において質量共に最大規模を誇る未曾有の仏教文献データベースであり、東洋学研究の継続的発展に多大な貢献をなす貴重な資料基盤を提供している。このデータベースには、人文学の領域では異例とも言える3億円を超える補助金を得ており、新聞紙上でも高い評価を以って報道されている。

研究業績リストに挙げたものは、本研究科における多数の優れた業績の一部に過ぎず、ほかにも、学術、社会、文化など多方面から受賞した業績が数多くある。日本学士院賞、フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞、芸術奨励文部科学大臣賞をはじめとして国内外の権威ある受賞の件数は過去4年間で28件に及ぶ(資料4-6:各賞受賞一覧)。

(資料4-6:各賞受賞一覧)

青柳かおる	第1回日本中東学会奨励賞	平成19年5月12日
秋山聡	第2回日本学術振興会賞	平成18年3月9日
池田謙一	第8回三宅賞	平成17年5月11日
池田謙一他	第4回助成研究論文吉田秀雄賞	平成18年11月9日
小田部胤久	ドイツ連邦共和国 フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞	平成19年6月15日
唐沢かおり・山口勤	日本心理学会優秀論文賞	平成18年11月3日
木下直之	芸術選奨文部科学大臣賞	平成20年2月29日
木下直之	平成17年度静岡県文化奨励賞	平成17年5月
五月女晴恵	第11回鹿島美術財団賞	平成16年5月14日
佐藤全敏	第17回学術研究奨励賞(財団法人 山下太郎顕彰育英会)	平成18年5月
塩川徹也	第16回和辻哲郎文化賞(学術部門)	平成16年3月1日
塩川徹也	日本学士院賞	平成17年6月13日
塩川徹也	教育功労賞(フランス政府・国民教育省)	平成18年2月15日
塩川徹也	パリ・ソルボンヌ大学メダル	平成19年2月24日
柴田元幸	第27回サントリー学芸賞(芸術・文学部門)	平成17年12月9日
末木文美士	中村元東方学術賞	平成18年10月10日
鈴木淳	第19回日本産業技術史学会賞(資料特別賞)	平成18年6月

田中章浩	日本認知心理学会優秀発表賞	平成 19 年 5 月 27 日
長神悟	イタリア「連帯の星」勲章 / コンメンダトーレ勲位	平成 17 年 9 月 21 日
沼野充義	第 55 回読売文学賞（評論・伝記部門）	平成 16 年 2 月
野崎 歎	講談社エッセイ賞	平成 18 年 10 月 1 日
藤田 覚	第 28 回角川源義賞	平成 18 年 12 月 4 日
松本三和夫	第 8 回電気学会優秀技術活動賞技術報告賞	平成 17 年 5 月
山口 勤	Outstanding Article Award, international Association for Conflict Management	平成 16 年 6 月
横澤和彦	日本認知科学会優秀論文賞	平成 16 年 12 月 11 日
吉澤誠一郎	第 1 回山口一郎記念賞	平成 17 年 3 月 19 日

### 研究成果の社会への還元と活用

本研究科の教員は過去 4 年間に 100 冊を超える一般書（資料 4 - 4：研究業績件数、P4 - 7）を刊行しており、このことは、研究の成果を広く社会に還元し、人類の文化と社会の継承的発展に資する知的・精神的基盤の構築と確保に努める本研究科の研究活動の重要な成果として高く評価できる。研究業績リストに挙げた『アメリカン・ナルシス』や『わたしの城下町』をはじめとする多数の著作はいずれも丹念かつ精緻な調査と理論的な考察に基づく研究成果が平易な表現で書き下ろされており、きわめて啓蒙性が高い。また、『世界の食文化 ロシア』や『村上春樹のなかの中国』（研究業績説明書参照）のように、著者自らの専攻領域の枠を越えた意欲的な取り組みの成果を一般読者向けに著したものもある。既存のディシプリンの枠に留まらず、人文社会系諸学の新たな学問領域の開拓を志す本研究科教員の不断の努力の結実として特筆に値する。これらの著作は、新聞・雑誌や放送メディアでも広く取り上げられ、好評を博し、一般社会での認知度もきわめて高く、『アメリカン・ナルシス』をはじめ受賞作も少なくない（研究業績説明書参照）。

また、展示会の開催などを通して研究成果の社会的還元成功した事例もある。『東大黎明期の学生たち-民約論と進化論のはざままで-』（研究業績説明書参照）は、2005 年 5 月に本学附属総合図書館で開催された特別展の展示資料目録であるが、同展には 1,700 人（うち学外入場者 1,286 名）もの来場があり、一般社会人から高い関心が寄せられた。目録の著者である月村辰雄教授は会期中に「競争社会の開幕と東大黎明期の学生たち」と題する講演を行い、市場経済万能論と福祉の維持との相克の問題を浮き彫りにし、多数の聴衆に深い感銘を与えた。

研究業績リストに挙げた業績以外にも国内外において高く評価された研究成果は数多くあり、なかでも中村雄祐准教授による研究論文 *Documentos para Tejedoras* (*Senri Ethnological Studies* 68, pp.97-147, 2005) は、国際社会に大きく貢献した事例として特筆に値する。本論文の成果を踏まえて構築された文書管理ワークショップは、国際協力機構（JICA）がグアテマラにおいて実施した「公共政策の計画立案の能力向上」のための研修においてきわめて有効な成果を上げ、研修に参加したグアテマラ人や JICA から高い評価を受けた。また、日本国内の地域社会の文化的発展に貢献した顕著な事例として「常呂公開講座」が挙げられる。本講座の長年の功績に対して、本研究科は 2007 年 11 月に北見市長より感謝状を授与された。そのほか、新たなメディアを活用した社会的還元の事例として、佐藤隆夫教授の実験・教育用刺激作成プロジェクト（Psychlops）が挙げられる。本プロジェクトは、コンピュータ・モニター上に錯視刺激等を容易に描画できる汎用性プログラムを約 50 本提供するものであり、ウェブサイトの視覚神経科学データベースに公開され、2007 年 11 月以降 297 件ダウンロードされ、すでに京都大学、NTTコミュニケーション科学基礎研究所、NHK放送技術研究所などで利用されている。

( 2 ) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由) 本研究科の研究成果は、国内外のトップ・ジャーナルでの多数の掲載や引用、及び国内外での多数の受賞例が示すように、学術面において国際的水準を凌駕するものが数多くあり、体系的な研究の蓄積と学問の継承的発展を重視しつつ、萌芽的・先端的研究の開発を待望する国内外の人文社会系学術界の期待に大きく応えている。また、研究成果の多くは、多数の一般書の刊行や多様なメディアを通して広く一般社会に認知されており、受賞件数も多く、人文知をめぐる学術的成果を社会的に還元すると共に、文化の活性化に貢献している。したがって、本研究科の研究は、学術、文化、社会のいずれの面においても期待される水準を大きく上回るものと判断される。

質の向上度の判断

事例1 「21世紀 COE 研究拠点形成プログラムによる研究の活性化」(分析項目 )  
 (質の向上があったと判断する取組)

21世紀 COE 研究拠点形成プログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」(2002～2006年度)は、多数の若手研究者を育成し、また、本研究科教員の研究にも大きな刺激を与えた。資料4-7は、本プログラムに関与した本研究科教員19名の学术论文と著書の件数である。これらのなかには死生学に関連する論文や著書が30%以上含まれており、死生学という未開拓領域への展開が見られる。さらに、シリーズ「死生学」全5巻が東京大学出版会から2008年5月より順次刊行される。

(資料4-7: COE 参画教員の研究業績件数の推移)

